様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３４４１０
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2015
課題番号：２６７５０２５４

研究課題名（和文）芸道における身体教育の段階性に関する現代的意義－「生成論」の観点から－

研究課題名（英文）The Contemporary Significances on the Nature of the Phases of Physical Education in Geido: From the Viewpoint of the Theory of Becoming

研究代表者
迫　俊道（Sako, Toshimichi）

大阪商業大学・総合経営学部・准教授

研究者番号：４０４２３９６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は芸道における身体教育の段階性に関してその現代的意義を明らかにすることである。芸道における身体教育の段階性は、指導者と学習者の間で展開されていく、複雑な生成過程によって創造されるものである。学習者は指導者による模範的な動きの模倣を意図する一方で、指導者もまた学習者のパフォーマンスの特質を確認している。芸道において段階性が生み出されるとき、指導者は学習者の段階の生成過程を見極め、次の段階へと導いている。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the contemporary significances on the nature of the phases of physical education in Geido. The phases of physical education in Geido have been created through a complex generation process developed between the leaders and learners. Although a learner intends to imitate leader's model behavior, a leader also checks the quality of the learner's performance. When phases are created in Geido, the leader ascertains the generation process of the phase of the learner, and guides the learner to the next phase.

研究分野：スポーツ社会学

キーワード：段階性

１．研究開始当初の背景

フローとは「行為に没入している時に人が感じる包括的感覚」のことである。心理学者のチクセントミハイによれば、行為者の技能水準と挑戦水準が均衡状態にあるときに、「フロー体験」が生成され、技能水準に比べて挑戦水準が高い場合、行為者は「不安」を感じ、技能水準と比較して挑戦水準が低い場合は「退屈」を感じるという（図 1、チクセントミハイのモデルを一部修正）。

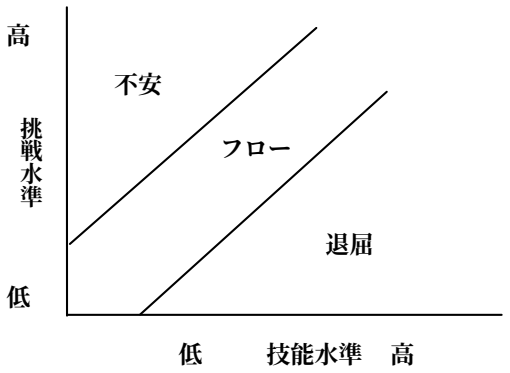

図１　フローモデル

これまでにフロー理論においては行為者が活動する際の社会性（相互作用）や経験の深まり（深化）という視点（行為者の技能水準と挑戦水準の向上による階梯）を補完する必要があることが指摘され、さらに芸道にフロー概念が含まれていること、芸道における身体技法習得過程の考察からフロー理論では否定的要因である「不安」の積極的意義、フローの到来を不断の努力を継続しながら「待つ」ことの意味が明らかにされた（迫、2010）。

教育哲学者の生田久美子は日本の芸道における修練過程の特徴について師匠も学習者も次の段階に進むという明瞭な観念はない（生田、1987）ことから、「非段階性」と指摘した。しかし、芸道に関する文献から指導者と学習者の相互作用を考察すると、指導者が学習者の状態を見極め次の段階へと橋渡しをしていくという「段階的指導」が認められる（迫、2006）。「非段階性」や「段階性」に関しては芸道の身体教育という一部の分野にとどまらず、「教育、学習は段階的なものではなく、本来非線型的なものではないのか」という教育の本質的な議論に通じる問題を含むものである。このように「段階性」という概念は、教育の根本的な課題にも結実するものであるが、「段階性」という観点から指導者と学習者の間に見られる相互作用の具体的な言動を含めた事象を、緻密な観察をともなう参与観察から検証する試みは全くといっていいほど行われてきていない。

２．研究の目的

(1) 先述したように生田は芸道の修行過程に関して「非段階性」という特徴を示している。芸道の段階性とは、指導者が学習者に対して出来上がりの単元や要素などを提供する「静的」なものではなく、双方の間で展開されていく相互作用、複雑な生成過程を経て創造されてくるものである（迫、2006）。芸道においては、「啐啄同時（そったくどうじ）」「不即不離（つかずはなれず）」「合不合（あうあわず）」など、指導者と学習者の関係性を示す独特な相互作用の形式がある。芸道の身体教育の相互作用、なかでも「段階性」を論じた研究は少なく、これらは指導者と学習者の相互作用から生じる「段階性」について分析する際に有効な視座となりうる。以上の相互作用の形式を参照しながら、芸道に関する各種文献、論文を収集し、身体教育における「段階性」という概念の意義を考察することを目的とした。

(2) 社会学者の亀山佳明は身体論を「定着論」「生成論」という独自の観点から整理している（亀山、2012）。亀山によれば動くものは変化し続けるものであり、その変化をそのままにとらえるには「生成」という視点から考察していく必要があるという。自転車に乗って走るという日常的な活動であってもその技術を体得した瞬間は身体と道具の間で適合的関係が実現した時であり新たな身体所作を獲得した瞬間である。亀山のいう「生成論」の観点から考えれば、指導者と学習者の間で展開していく、時に複雑な相互作用の往還を通じて、学習者が新たな身体動作を獲得した瞬間においては、指導者と学習者は新しい段階の出現の到来を自覚すると思われる。新たな技術の獲得、これまで出来なかった身体所作の習得、その過程における指導者と学習者の相互作用、段階性の生成過程を示す具体的言動を観察、記述し、その事象を分析していくことで、「段階性」という概念が持つ身体教育の実践場面での意義を検証することを目的とした。

３．研究の方法

(1) 芸道の文献に見られる指導･学習の相互作用の形式を精査するために、芸道における指導、稽古の実態を報告している著書、論文を渉猟し、そこで見られる相互作用の具体的事例を析出することを試み、「指導者」と「学習者」という観点から、記述されている内容の整理を行った。また、その文脈において「段階性」という概念がどう位置づけられているのか検討した。

(2) 芸道における修練の「段階性」の具体相を浮かび上がらせるために参与観察を行った（2014 年 4 月から 2016 年 2 月まで）。芸道の中でも神楽を研究対象として取り上げ、神楽の練習場面の映像資料を収集し必要に応じてその内容を分析した。学習者が新たな身体所作の習得するために、指導者から与え

られる言動と、その言動に対する学習者の反応など、神楽の指導場面における言動を精査するとともに、指導者と学習者に対するインタビュー調査を通じて相互作用の実態、特に「指導者の観点」から芸道における身体教育のプロセスを描き出すことを目指した。神楽の練習模様を収録した映像の中から、段階的指導に関わると思われる映像資料の内容を指導者に提示し、その内容に関するインタビュー調査を行った。最後に、参与観察の調査結果を踏まえて、身体論研究における「なぞり」や「同調」に関する理論を参照し、今後の研究活動の課題を検証した。

４．研究成果

（1）芸道の修練過程に関する文献研究として、最初に行ったのは、「指導者」と「学習者」の観点から整理を行うことであった。芸道の修行プロセスについてまとめられた文献の数は多くはない。収集することが出来た資料を通読した結果、大半の内容は、「学習者」の立場から参与観察等を実施してまとめられたものであり、「指導者」が「学習者」の技能を見極めて段階的指導を行っていく過程は概括的に論じられることはあっても、その内実を丁寧に記述していく試みはほとんど行われてきていないことが確認された（この点について、フィールドワークの対象の選定に関しては制約が伴うが、研究を実施する者が研究に着手する以前から芸道に関してある程度の技能を有し、指導者として関わることが可能な調査対象を選定しなければ、指導に関する参与観察を行うことは困難であると思われる）。

（2）参与観察については、広島県広島市において十二神祇神楽を継承している神楽団（神楽を継承している組織）に対して実施した。インタビュー調査では神楽の指導の段階性に付随する事象（熟練者と非熟練者ではどのようなポイントで指導内容が異なるのかなど）を質問した。神楽の舞の指導者は、基本的なことが習得できた上で学習者の創意工夫を求める、ある一定の段階では指示を意図的に行わなくなることもあると述べた。また奏楽の指導者は、最初に中核となる部分を教え、その後に学習者の習熟度に応じた細かな指導を行うと説明した。神楽の指導者は神楽を習う者（学習者）の舞や奏楽の技量に応じた段階的な指導を行っていることが明らかになった。

（3）本研究では、調査実施者が神楽の指導を行うという、指導者としてフィールドワークを実施する可能性を検討したが、複数の指導者が練習現場に混在することで学習者が混乱する事態が想定された為、調査対象組織への影響を考えて、限られた場面で指導を行い、その限定的な指導場面を記録することにした。神楽の練習は、指導者の模範演技を模倣する形で練習が進む。同一の指導者であっても学習者に伝える表現や指摘内容が異なる場合があり、学習者が混乱する場合があった。複数の指導者が指導に関与することによってさらに学習者の混乱や誤解を招く危険性もあり、複数の指導者が介在することの課題が浮かび上がった。

（4）本研究で着目した段階とは明確に整然と区分された段階ではなく、学習者が指導者の模範的な動きに自らの動作を合わせようとする同形同調（亀山、2013）を繰り返していく中にあって、学習者の身体所作の習得状況を指導者が見極めていく中で生成されるものであることが確認できた。

神楽の指導者は学習者の単純な間違いを修正する場合は、練習を中断し即座に手足の動きの間違いなどを指摘する。一定の技能が身についた学習者に対して、指導者は具体的な指導を行う前に自らが違和感を覚えた部分について、学習者の立場からどこに問題があるのかを検証した上で指導を行う場面が見られた（指導者は身振り手振りで探索）。指導者にその時の映像を提示し、その行為の意味を尋ねたところ、正しい動きを確認するとともに、学習者の模写もあわせて行っているという内容の言説が得られた。

学習者が新たな身体所作を習得した段階では、指導者は学習者に新たな課題を提示するのであるが、段階が生成される際には指導者と学習者の間で「なぞり」（尼ヶ崎、1990）と呼ばれる独特の相互作用の形式が影響していることが推察された。尼ヶ崎彬によれば、「なぞり」とは、「日本語の『学ぶ』が『まねぶ』即ち真似から来ていることは興味深い。しかもこの真似は表面的な操作ではなく、いわば全身をもって能動的に遂行される典型事例の反復である。その目的は(あるいは結果は)、自らその具体例を実現することによって、その『型』を身につけることである。このような真似を『模倣』と区別して『なぞり』と呼ぶ」（尼ヶ崎、1990、183 頁）と説明されている。

これは学習者が指導者の模範演技を「なぞる」という意味で記述されたものとして理解できるが、実際には指導者が学習者の演技や状況を「なぞる」という行為も行われているのではないかと思われる。指導者と学習者による二重の「なぞり」がうまく機能した場合、指導者と学習者の双方による同形同調、基底同調（亀山、2013）により課題が解消され、「啐啄同時」と呼ばれるような状態が生成されると考えられる。

以上のように芸道における身体教育の段階性の生成には、指導者と学習者の間で展開される「なぞり」という独特の相互作用が影響していると思われるが、その構造については本研究では十分に明らかにされておらず、今後の研究課題となった。

＜引用文献＞
① 迫俊道、芸道におけるフロー体験、渓水社、2010
② 生田久美子、「わざ」から知る、東京大学出版会、1987
③ 迫俊道、芸道における身体教育の段階性に関する一考察、スポーツ社会学研究、14 巻、2006、83－93
④ 亀山佳明、生成する身体の社会学－スポーツ・パフォーマンス／フロー体験／リズム、世界思想社、2012
⑤ 尼ヶ崎彬、ことばと身体、勁草書房、1990
⑥ 亀山佳明、「身体論の可能性」、その後－制度の身体論から体験の身体論へ－、21 世紀のスポーツ社会学、創文企画、2013、84－100

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 2 件）
① 迫俊道、「気づかせる」指導とはどういうものか－コーチングの社会学に向けて－、日本スポーツ社会学会第 25 回大会、2016 年 3 月 20 日、一橋大学（東京都）
② 迫俊道、神楽の継承過程における指導者・学習者の相互作用に関する分析、日本地域資源開発経営学会 第４回全国大会、2015 年 7 月 12 日、サテライトキャンパスひろしま（広島県民文化センター内）（広島県）

６．研究組織
(1)研究代表者
迫　俊道　　（SAKO, Toshimichi）
大阪商業大学・総合経営学部・准教授
研究者番号：40423967